

2018年7月15日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「とりなし」

聖書：創世記18:16～33

この物語は、神が悪に満ちたソドムとゴモラの町を滅ぼすという中で、アブラハムの「とりなし」があるとされる。しかしもう少しきちんと見る必要がある。聖書はこう記している。主は言われた。「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。わたしは降って行き、彼らの行跡が、果たして、わたしに届いた叫びのとおりかどうか見て確かめよう。」ここで神は、決して高い所から見下ろすお方ではないということが記される。《訴える叫び(を聞いて)わたしは降って行く》と神は言うのである。この降り給う神は、あのクリスマス物語もそうであるように、この世に降り、飼葉おけの中に身を置くお方である。

アブラハムは、ソドムの町が滅ぼされないように神に祈る。「正しい者が50人いるならばお赦しにならないのですか、・・・45人いるのならば、40人、30人、20人、10人・・・」と祈りは続く。私たちはこのアブラハムの執り成しの祈りの物語を往々にしてアブラハムの頑張りに目が行くものではないか？しかし、忘れてならないことは、神がアブラハムの祈りの前に留まり、訴えに耳を傾けておられたと言うことにある。そして、アブラハムが50人・・・10人と言う度に神は「その者たちのために、町全部を赦そう・・・わたしは滅ぼさない・・・わたしはそれをしない」と答える。このところからも伺えるように、神は町を滅ぼす事が目的ではない。神は、人の誤りや欠点、悪の部分を探すという事よりも、正しさや真実を探し、常に十人の正しい人を求めたもう方である。

ただいわゆる「正しい人」とは何も道徳的な“正しさ”ではない。道徳は、国や文化、時代の違いでその正しさの価値観は変わっていく。聖書の言う「正しい人」とはどういう人か？あのイエスの山上の説教の「十の幸い」を見る時、そのかたちが見えてくる(マタイ福音書5:1～11)。

最後に「とりなし」を究極的に行った方は誰か？それはあの十字架に架かれたキリストに他ならない。何の為に？私の痛み、弱さ、罪を担い、私と共に歩み、担うゆえに究極の執り成しをしてくださった。私たちは神のとりなしのゆえに罪赦された者として、喜びを持って、正しく「幸いな人」と呼んで頂く歩みを、このところから教えられて行きたい。私たちのために、今日も主イエスの「とりなし」がささげられている。(神谷)